

Title	教師における西田哲学の受容：雑誌『信濃教育』における菅沼知至の教師修養論を参考に
Sub Title	The reception of Nishida's philosophy by teachers : with reference to Tomoyuki Suganuma's theory of cultivate the teacher mind in the journal "Shinano kyoiku"
Author	本郷, 直人(Hongo, Naoto)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2023
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.150 (2023. 3) ,p.1- 33
JaLC DOI	
Abstract	<p>In recent years, there has been an increase in the number of "Kyoto School pedagogy" studies that attempt to clarify the influential relationship between Nishida's philosophy, the Kyoto School, and education. However, the influence of Nishida's philosophy on the Taisho new education, as pointed out by Satoji Yano, remains at the stage of hypothesis. The hypothesis is that Nishida's philosophy of "Pure Experience" and "Self-Awareness" had a strong influence on the formation of the educational thought of the new education.</p> <p>The purpose of this paper is to explore Kitaro Nishida's influence on education, with particular attention to teachers' activities during the Taisho period, and to supplement Yano's hypothesis. As a case study, this paper will use "Shinano Kyoiku" as reference material and clarify how Nishida's philosophy was accepted through examination of an essay by Tomoyuki Suganuma, who had been working in the field of education as a teacher.</p> <p>Suganuma places "life" at the foundation of his educational thought, and explains that to teach children to develop their "true self," teachers need to cultivate the teacher mind. Suganuma was strongly influenced by "An inquiry into the Good." This may suggest that Nishida's philosophy had a huge impact on both the theoretical and the practical side of education.</p>
Notes	特集：教育学特集号 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000150-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000150-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 教師における西田哲学の受容

——雑誌『信濃教育』における  
菅沼知至の教師修養論を参考に——

—— 本 郷 直 人\* ——

## **The Reception of Nishida's Philosophy by Teachers: With Reference to Tomoyuki Suganuma's Theory of Cultivate the Teacher Mind in the Journal "Shinano Kyoiku"**

*Naoto Hongo*

In recent years, there has been an increase in the number of "Kyoto School pedagogy" studies that attempt to clarify the influential relationship between Nishida's philosophy, the Kyoto School, and education. However, the influence of Nishida's philosophy on the Taisho new education, as pointed out by Satoji Yano, remains at the stage of hypothesis. The hypothesis is that Nishida's philosophy of "Pure Experience" and "Self-Awareness" had a strong influence on the formation of the educational thought of the new education.

The purpose of this paper is to explore Kitaro Nishida's influence on education, with particular attention to teachers' activities during the Taisho period, and to supplement Yano's hypothesis. As a case study, this paper will use "Shinano Kyoiku" as reference material and clarify how Nishida's philosophy was accepted through examination of an essay by Tomoyuki Suganuma, who had been working in the field of education as a teacher.

Suganuma places "life" at the foundation of his educational thought, and explains that to teach children to develop their "true self," teachers need to cultivate the teacher mind. Suganuma was strongly influenced by "An inquiry into the Good." This may suggest that Nishida's philosophy had a huge impact on both the theoretical and the practical side of education.

---

\* 慶應義塾大学・院生

## はじめに

近年、教育学において「京都学派教育学」への関心が高まってきている。代表的な研究として、矢野智司の『京都学派と自覚の教育学：篠原助市・長田新・木村素衛から戦後教育学まで』（勁草書房，2021年）が挙げられる。矢野はこの書で以下四点の課題に取り組んでいる。すなわち、(一)1910年代後半から1960年代の日本の教育哲学、思想における西田幾多郎や田邊元に代表される京都学派哲学の思想的影響を明らかにすること、(二)京都学派哲学を日本教育学説史の中心に据え直し、日本の教育学における思想全体の相関的動態図（コンテキスト）の生成・変容を描くこと、(三)こうした背景を基に形成された緩やかな知的ネットワークのなかで育まれたと見られる個々の教育学テクストに対する解釈を行うこと、(四)戦前から戦時・戦後を貫く教育学的課題の思想的系譜を再検討すること<sup>1</sup>、を課題に据えている。本書は、木村素衛や森昭といった従来京都学派教育学の系譜と見做されてきた思想家のみならず、篠原助市や土田杏村らこれまで新カント学派に位置づけられてきた思想家の思想構築に西田哲学・京都学派哲学の影響があったことを明らかにし、また稲毛金七ら八大教育主張を唱えた思想家、そして現場の教師にも広大な影響を与えたことを仮説的に示唆する。これは複雑に絡み合ったように思える日本教育思想群の動態を、動的でいて統一されたコンテキスト理解へと導き、西田―田邊を淵源とする生動的―歴史的な「自覚の教育学」の閉ざされていた可能性を拓くこととなる<sup>2</sup>。以上、矢野（2021）は京都学派教育学への包括的研究と言える。また、その他に木村や森に焦点を当てた研究も多く行われている<sup>3</sup>。

しかし、木村たち西田周辺の教育哲学者、思想家に対する研究に比べ、根源たる西田哲学の教育への示唆や、教育思想家への影響といった研究は十分とは言いがたい。その理由として、一つに西田が教育に関して述べた論文が僅かであること（「教育学について」（1936年））、もう一つに教育思想家の論述において多くが西田哲学からの影響を明示しないことが挙げら

れる。篠原が新カント学派の系譜に位置する者として解釈され、矢野が指摘する京都学派・西田哲学からの影響が見落とされてきたのは、西田や田邊の思想の影響を明らかに受けて書かれたテキストにおいてもそのことを表記せずに、自らの思想・テキストの内奥に取り込んでいるからである。つまり、矢野が行ったように、教育思想家たちのコンテクスト理解において、その思想の背後に流れる水脈として西田哲学の影響を丁寧な解釈していく必要がある。

こうした教育思想家の思想・テキスト解釈において隠れた西田哲学・京都学派の水脈を探る必要性は、教育実践家に対しても同様と言えるだろう。実際、明治末から戦前期にかけて西田の著作を読み、京都学派哲学に影響を受けた教育者は多くいた<sup>4</sup>。ここでは例として信濃教育会を参考にしたい。信濃教育会・信濃哲学会と西田幾多郎の関係は先行研究において指摘されている<sup>5</sup>。西田は何度も信州の地に赴き講演するなど、西田と信濃教育界の繋がりは深く、また西田のみならず、田邊、木村も講演を行うなど、京都学派全体としても信濃教育界との繋がりがあつた。これだけでも、西田哲学と京都学派哲学が教育現場に立つ教師にも影響を及ぼしていたことが推察できる。しかし、詳細に信濃の教師への西田哲学の影響を考察したものは管見の限り確認されていない。信濃教育会が発刊する雑誌『信濃教育』の論稿には教育実践の報告に限らず、教育政策への応答や著名な哲学者の思想検討など内容が多岐にわたる。また、『信濃教育』には西田の講演録が3稿掲載されており、木村や高坂正顕、務台理作らも『信濃教育』に寄稿している。そして、西田哲学に強い関心を持った教師を中心に成立した信濃哲学会の活動がうかがえる記述も掲載されているなど、『信濃教育』における教師たちが残した論考から西田哲学、京都学派の教育実践者への影響を考察できる余地があるのではないだろうか。つまり、矢野によって切り拓かれた「自覚の教育学」の新たな展開は未だ拓かれたばかりであり、京都学派哲学と日本の教育学の関係は忘却された状態を抜

け出したに過ぎず、今後詳細に西田哲学・京都学派哲学の教師への影響を考察する必要があると言える。

以上より、本稿では信濃の教師に西田哲学がどのような影響を与えたのかを明らかにすることを目的とする。検討する資料として雑誌『信濃教育』を採用する。本稿は以下の手順に従い論を進める。最初に、先行研究を参照し信濃教育会、信濃哲学会の沿革を示す（1節）。次に、『信濃教育』に多く寄稿し、信濃哲学会の中心人物でもあった菅沼知至に注目する。『信濃教育』における論考を参考に、彼の教師修養論を示し、それへの西田哲学の影響を探る（2節）。最後に、本稿の考察をまとめる参照軸として、近年の大正新教育実践家の思想に関する研究動向を整理し、教育思想に対して西田哲学が与えた影響に関する仮説を補うものとして本稿を据え（3節）、今後の研究課題を提示することとしたい。

## 1. 信濃教育界の人格主義的風潮の根源—信濃教育会、信濃哲学会の創設過程より

本節では、『長野県教育のあゆみ』（労働旬報社、1975年）、『信濃教育会90年史 上』（信濃教育会出版部、1977年）を参考に信濃教育会の創立前史から大正前期までの沿革を示す。そして、信濃教育会が明治末から大正にかけて人格主義的風潮を県下に広め、西田哲学や京都学派哲学への関心を深めていき、信濃哲学会創立に結実する過程を概観する。

### (1) 信濃教育会の沿革

1886（明治十九）年7月に信濃教育会は結成された。前身は1884（明治十七）年2月に組織された長野教育談会であり、同年末に長野教育会と改称され、さらに組織を拡張し信濃教育会になる<sup>6</sup>。信濃教育会は1886年10月に『信濃教育会雑誌』（現、『信濃教育』）を創刊する。本雑誌は、2020（令和二）年3月には第1600号を発刊するなど、現在まで発刊を継続し

「日本一長寿の月刊学術図書」を謳っている。以上より、信濃は明治期から教育への関心が強かった地域と言える。しかし、信濃教育会は創立当初から、いわゆる「信州教育」として名高い自由主義教育・人格主義教育がなされていたわけではない。以下、信濃教育会の成立過程、そして「信州教育」が確立するまでを概観したい。

『長野県教育のあゆみ』によれば、教育会創立の過程は 1870 年代後半にさかのぼる必要がある。当時、天皇絶対主義を国体としそれに寄与する教育制度確立<sup>7</sup>を図る明治新政府は民権派の抑圧が重要な課題となっていた。1881（明治十四）年に長野県令に着任した大野誠によって教育学者能勢栄が師範学校長に任命され、新しい教育内容・教師のあり方を県下に広めることが図られた。国家主義・天皇中心主義の普及に寄与する教育の徹底が主要な任務となるなか、能勢の指導の下で長野教育談会が設立され、その後県下の教師を集め長野教育会が発足する。つまり、信濃教育会の前身である長野教育談会、そして長野教育会は「官設」であったと言える<sup>8</sup>。

ただ、この長野教育会は会員を訓導と師範卒業生に限定しており組織拡張が難しく、各郡の教育会を統合する必要が生じていた。ここから、改組し会員を県内全域に募ることを組織目的として信濃教育会が創立することとなるのである。また、会事務所は県庁内にできるなど、信濃教育会も前身を引き継いだ形で「官」の影響が色濃いものであった。つまり、県令大野の教師統制は信濃教育会の創立によってさらに強化されたとみてよいのである<sup>9</sup>。以降、信濃教育会は師範学校令・小学校令に従い、師範学校を教員統制の根源として捉え、「国家」を作り上げていくための布石として教師を使命づけていく。これはまさに富国強兵に資する臣民の育成を明治期の信濃教育会は志していたと言える。この傾向は、教育勅語の発布、そして日清戦争によって天皇主義的、軍事主義的国民教育への期待が高まるなかで強められていった。

そうした状況が変革していくのが大正期であり、明治教育体制が再編さ

れ「信州教育」が成立していく。最初に表れたのは佐藤寅太郎<sup>10</sup>を中心にした教育会自主化、「長野師範閥による長野県教育行政の確立」という動きであった<sup>11</sup>。ここで注目すべきは、1915（大正四）年に起こった東西南北会<sup>12</sup>による「星菊太長野師範学校長排斥事件」<sup>13</sup>である。『長野県教育史 第三卷』（長野県教育史刊行会、1983年）において、東西南北会は「大正初期の人格主義的な教育思潮をふまえ、大正前期に県教育界の主流を構成した教育集団であった」<sup>14</sup>と評される。星菊太長野師範学校長排斥事件を機に、東西南北会は県教育界の主流となると同時に、人生における「深いもの」「本質的なもの」「真実なもの」をつかむことが生徒への感化・教育の源泉であるとする彼らの人格主義教育思潮が県下に広がりを見せることになる。事件の翌年に西田幾多郎を招き、長野・上田・諏訪で講演会を開いたことも信濃教育界の思潮の変化と無関係とはいえないだろう。また、見落としてはならないのは大正期の動きの出発となった佐藤寅太郎の動きの背景に師範学校卒業生が一定の社会的勢力となりつつあったことである。星校長の後任内堀維文は県教育界上層部の熱心な運動を受け長野にやってくることとなり、彼の下で「特別学級（ダルトン・プラン）」や「自由画教育」、信州白樺派の運動といった自由主義教育が展開していく<sup>15</sup>。

## (2) 信濃哲学会の成立

次に、信濃教育会の会員を中心として作られた信濃哲学会の成立過程を概観する。信濃哲学会は、星菊太長野師範学校長排斥事件の5年後、1920（大正九）年1月に創立された。創立理由は、長野県小学校教育者の有志によって西田幾多郎の教えを仰ぎその哲学を研究するため、というものであった。それゆえに、1945（昭和二十）年に西田が亡くなると信濃哲学会も幕を閉じることになる。以下、金井徹（2013）、『長野県教育史 第三卷』（1983年：638-640頁）を参考に信濃哲学会の創立過程をまとめる。

西田と長野県教育会を結びつけたのは、岩波茂雄、務台理作、金井正ら

であった。1916（大正五）年に西田は岩波から諏訪教育会での講演を依頼された。その際、務台は長野でも行うよう西田に依頼した。そのような背景の下、西田は金井を中心とした小県部会主催により上田中学校で「現代哲学における科学的眞理の概念」、その翌日に長野市部会主催で「現今の唯心論」という題で講演した。この講演の要旨は『信濃教育』359号に掲載されている。

そして、務台を媒介として西田との関係を深めた信濃教育会の一部の会員は、上記の西田への講演依頼を務台に仲介させた守屋喜七<sup>16</sup>を中心とし信濃哲学会を創立する<sup>17</sup>のである。信濃哲学会は務台を通して西田の承諾を得て創立された。当初の会員には、信濃教育界を先導した岡村千馬太、齋藤節、高田吉人、長坂利郎、西尾実が名を連ねた。他にも代用教員や女子会員など、四、五十名程が会員の標準数であった。信濃哲学会に所属した者は皆西田哲学の受容に積極的であったものの、特に菅沼知至<sup>18</sup>は西田哲学に深い感銘を受け、務台とともに西田の下を訪れるほどであった。信濃哲学会は西田によって推薦された安倍能成から二年間西洋哲学史を学び、1923（大正十二）年には会員約四十名で京都に赴き、西田から直接カントの実践哲学の講義を受けた<sup>19</sup>。

信濃哲学会を皮切りに長野県内各地の教育会に哲学会、哲学同好会が作られ、西田の教えを受けた木村素衛や高坂正顕、下村寅太郎、西谷啓治らが講師となっていたことが講演の記録として残っている<sup>20</sup>。

## 2. 菅沼知至の教師修養論—雑誌『信濃教育』の論考を参考に

### (1) 西田哲学信奉者、菅沼知至

菅沼知至（1898–1987）は『信濃教育』に多くの論考を寄せ、また信濃哲学会において中心的役割を担った、小学校教師を長年務めた人物である。務台理作は「学究生活の思い出」で長野師範学校訓導時代を回顧し、その中で友人菅沼について触れている。



西田幾多郎の『善の研究』を読んだ。この書物をはじめに私にすすめたのは高師の寄宿舎で同室にいた土田杏村であった。長野師範の教師をしている間に信州の小学校の教師菅沼知至（その頃は柳本とっていた）と知り合いになったが、彼は熱烈なその愛読者であった。菅沼は信州の小学校長をしたり県視学をしたりして今は伊那の郷里にひきこんでいるが、どうして西田幾多郎に傾倒したかはよくわからない、とにかく彼は信仰に近い熱情をもって西田のものを愛読した。西田の京大の『芸文』に連載した（のちに『哲学研究』に連載）「自覚に於ける直観と反省」をガリ版印刷にして教師仲間に分けたりしていた<sup>21</sup>

務台が回顧しているように、菅沼は西田哲学の熱烈な愛読者であり、西田の『善の研究』や『自覚に於ける直観と反省』など総べての論文集を買い集めていた。これが信濃哲学会創立に中心的に関わった原点であると言えるだろう。

次に菅沼が西田の思想に出会い、熱烈な信奉者になっていった過程を、彼が『信濃教育』に寄せた論考「信濃哲学会と私」（841号、1137号）、「対談 哲学と信州の教育界」を参考に明らかにする。

菅沼は長野県師範学校二年生だった1909（明治四十二）年に三宅雪嶺の『宇宙』を一ヶ月の小遣い全額を使って講読した。それ以来、哲学書や思想的な書物にひかれていく。三年生の二学期の初め頃には、同級生22名<sup>22</sup>と協力して月賦払いで大西博士全集七冊をそろえ寄宿舎の書棚に並べた。そして四年生の二学期に愛読書となる萩原守衛の遺稿『彫刻真髓』を知る。他にも、中島力蔵、波多野精一らの著作で西洋哲学に触れることとなる。彼は当時を回想し、師範生は将来教育者になるものとして倫理学や教育学の書物を参考書として読む傾向があると述べる。

そして四年生の夏、当時東筑摩郡和田小学校長を務めていた岡村千馬太を訪問した際、本立てに新刊の『善の研究』があった。既に地位を確立し

ていた岡村が読む本ということは良書だと菅沼は考えた。そして彼は帰校してから購読すると魅せられて一生の愛読書となる。これが西田幾多郎の名を知った初めである。彼は『善の研究』に対して以下のように述べる。

西田先生の深い思想の根底などうてい知ることにはできないのであつたが、読んでいる間は、まったくすべて忘れて没入し、深く輝く真理のまつただなかに導かれゆく法悦境に浸り、全魂魅了されてしまうという状態であつた<sup>23</sup>

この記述から、菅沼は西田に心酔していた一方で、西田の思想内容を真に理解するには至らなかったことがわかる。以上より、後の信濃哲学会での活動など、彼の西田哲学を積極的に学び受容する姿勢は師範生時代に原点があると言えるだろう。

明治末から大正初にかけ、信濃教育者の多くは、一度は必ず『善の研究』を読んだと菅沼は回想する。また、1915（大正四）年から論文「自覚に於ける直観と反省」が京都大学の『芸文』で連載されていたため（1917（大正六）年4月より京大哲学科で創刊された『哲学研究』に掲載されるようになる）、雑誌を全部購入し学校内の有志で読み合わせを行うなど、西田哲学の研究に熱心であった。信濃教育者の中には、京都哲学会に加入し『哲学研究』を購読するものが増え、丹念に西田哲学を研究するなど西田幾多郎、西田哲学への憧憬が信濃教育界に高まりつつあるなか、信濃哲学会が創立される地盤が形成されていたとも回想している。以降、菅沼は信濃哲学会創立に関与し、中心人物として西田哲学を積極的に受容していく。

## (2) 『信濃教育』で展開された菅沼知至の教育思想

菅沼は『信濃教育』に、インタビューを受けた記事も含めて、336号（1914年）から1200号（1986年）に至るまで47本寄稿している（表1を

参照)。この47本の論考の中から、彼の教育思想が表れていると考えられるところを参照したい。

表1 雑誌『信濃教育』における菅沼知至の論考一論

和暦	号	論題	補足
大正3年	336	児童の直観力	著者名は柳本知至
大正4年	340	ヒュマニスト	
	341	小泉八雲を憶ふ	
	344	愛と革命	
	346	本県教育の使命	
	349	萩原守衛の一生	
大正5年	354	教師の重みと教授の徹底	
大正6年	364	教権の確立	
	368	村松先生	
	372	ヤコブ・バーメ	
大正14年	460	芭蕉の句	以降菅沼知至名義
大正15年	480	修身高等小学校読本巻一、二に就て	
昭和3年	505	関東聯合教育會記事	
昭和4年	509	信濃教育特色の一面	
	510	修省録	
	512	行脚の掟と芭蕉	
	513	會館の落成を祝して	
昭和5年	528	信濃教育の本義に還れ	
	529	関東聯合教育會に出席して	
昭和7年	553	関東聯合教育會記事	
昭和8年	555	感激性の缺乏	
	562	木を詠んだ芭蕉の句二三につき	
昭和9年	567	萩原礫山を憶ふ	
	574	雨の徳本峠	
	578	教育とは何ぞや	
昭和10年	583	訓令 互返雜記	
	585	芭蕉の遺語と教育	
	586	北陸の旅	
	589	左千夫の小説に就いて	
	590	「左千夫に就いて」の捕遺	

昭和 14 年	636	芭蕉の三紀行に就いての一考察	
昭和 22 年	723	守屋先生を憶ふ	
昭和 25 年	765	秋の陽	
昭和 26 年	775	守屋喜七文集の編纂について	
昭和 31 年	841	信州教育を育ててきたもの 七十年の回顧 先輩に聞く 信濃哲学会と私	
昭和 33 年	863	歌人としての赤彦 赤彦先生の晩年 の歌について	
昭和 35 年	889	対談「哲学と信州の教育界」 菅沼知至に聞く	
昭和 44 年	996	先生の追憶 浅井先生の思い出	
昭和 48 年	1037	新入会員よせて 第一部 恩師齋藤節先生を偲ぶ	
昭和 50 年	1068	研究「青杉」読後感	
昭和 51 年	1080	第一部 齋藤節先生 齋藤節先生の追憶	
昭和 55 年	1118	岡弘先生の九十歳を祝う 松岡弘君 の卒寿を祝して	
昭和 56 年	1137	信濃哲学会と私	
	1141	務台理作君の思ひ出	
昭和 58 年	1163	弔辞	
昭和 59 年	1170	折にふれて 井出弥門君を憶ふ	
昭和 61 年	1200	回想 長野師範学校時代の 先生の思い出	

(信濃教育会編『雑誌「信濃教育」総目録』(国書刊行会, 1982年), 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/6086130> 最終閲覧日 2022/10/17) を参考に筆者作成)

まず、菅沼が初めて『信濃教育』に寄稿した論考「児童の直覚力」を参照する。ここでいう「直覚力」とは、何等の先入的観念、利害的関係的私情もなく、公正明大に或もの・ことの印象をもつ精神の力である。そして「児童の直覚力は非常に鋭敏であると思ひます児童は明鏡止水の様な心、

鋭いメスの様な直覚によつてどんな秘密でも、どんな内容でも見通さずにはおかないのですから私達は決して、自己を詐つたり、自己を衒つたり、自己広告をしたりすることは許され」<sup>24</sup> ないとする。つまり、児童は独特な「直覚力」を用いて教師の貧弱、卑怯を見破るがゆえに、教師が児童の前に立った時は自己を飾り偽ることは許されないと考えるのである。そして彼は「児童の直覚力」を教育の前提とし、教師に必要な力を示す。

其の深み、其の根柢を獲得するには直の生命に触れた修養を成し、真の自己を見出して、些の衒気も無く、些の誇張もなく、知るを知るとし知らざるを知らずとし、不能を不能として、しかも些の私を有さず、誠心誠意自己の最善を尽す真の力を養成するにあると思ひます<sup>25</sup>

教師は偽ることができないがゆえに「真の自己」を見出す必要があり、そのためには「直の生命に触れた」修養を成さねばならないと説く。後述するが、本稿では彼の教師修養論に西田哲学の影響を認めることができるのではないだろうか考える。

では菅沼のいう教師が「真の自己」を見出すとはどういうことなのか。一言で述べるのであれば、「人として徹底する」ということである。論考「ヒューマンスト」において、以下のように教育者の現実を批判する一節がある。

我が教育者の生活を考え理想を思い内部を束ねて見ると（中略）彼ら教育者に遠大の理想なく、生気なく創造のない（中略）。自ら先ず真に感じ、自ら先ず真に泣き、自ら先ず真に憤らずして如何にして他を感動させ憤泣させる事が出来よう<sup>26</sup>

菅沼は、教育者は人を教育すべき責任を担うからこそ、人を教える前に

まず自身が「人」として「真に感じ、真に泣き、真に憤」る必要があるとする。その態度にこそ「生命」があり、「人として徹底する」ということである<sup>27</sup>。また、論考「教権の確立」において、「我等は如何に怖ろしくも、真に自己に忠実であり、真に自己の要求に立ち、真に意義ある人生に生きようとするには、徹底を怖れてはならない。理想に向かって、終始一貫せねばならぬ。そして飽く迄も純粹でなければならぬ」<sup>28</sup>と述べ、「徹底」とは純粹に理想に向かって終始一貫することであるとする。彼は自己の使命を自覚し、「人として徹底」し使命に殉ずるための修養を行える者を「教師」と考えるのである。そして、教師自身が自己の尊貴なるところを自覚し、徹底する自己を確立することが教育の権威を高めることにつながる。論考「信州教育特色の一面」においても、信州教育の特色の一つとして、信州教育者の多くが強く「教権の確立」に重きを置いて日々の教育的行動を行っているとする<sup>29</sup>。

また、別の論考においても菅沼は「生」を論の根底に据えている。論考「教師の重みと教授の徹底」において、「教授の対象たる児童も教授者たる教師も共に生きた人間である。生きた人間たる以上、其の所には生活の様式と、気分の緊張に様々の相違があるのは論を待たぬ。而して其の生きた精神の活動に影響を及ぼす教育全体の仕事は、一定の形式的方案を具備するの以前において、もう一步根本的に、もつとこれら凡てに大きな力を与へる源泉がなくてはならぬ」<sup>30</sup>と述べる。この「生きた精神の活動に影響を及ぼす」ための教授の本質として以下のように述べる。

人として、宇宙人生の真善美に対する真の憧憬、真の要求が存在する。その要求に対して、之を満たし、之に解決を与へ、之に暗示を施して行くのが教育の作用であり、教授の直接の目的である。故にこの切実なる自己の要求が真に充たさるる時に於て、湧然として起つて来る興味が真の興味であるのだ<sup>31</sup>

「生」を根底に据え、「生」が「宇宙人生の真善美に対する真の憧憬、真の要求」に向かっていくこと、そしてその要求に働きかけていくことこそ教育の本質的な目的だと主張するのである。つまり彼の教育思想は、「生の活動＝宇宙人生の真善美への要求＝自己の要求」という枠組みを根底とし、これに働きかけることこそ教育である、という考えとして理解することができるだろう。

こうした教授上の目的を達することができる「教師像」を菅沼は以下の様に示す。

教師自身に人生を熱愛し、真摯なる、敬虔なる態度を以て自己の本性を追求し行かねばならぬと云ふことである。教師自身切実なる要求に立つて、常に向上し、努力していかねばならぬと云ふことである。教師自身の自己の力によって自己の生命を開拓して行くことが、臆て児童をして自学自修の習慣を得しめることになるのである。かくて自己充実を旨として常に修養を怠らない教師には偉大な力が生じ、其の人格の重みがまして来て、多くの児童を引きつける底力が備はる様になるのである<sup>32</sup>

先に述べたとおり、菅沼は子どもの「生きた精神」の要求を充たし「真の自己」を見出すには、子どもを教える教師こそ自己の本性を追求する必要がある、教師自身が自己の力によって「生命」を開拓していくことが理想なのである。そして、その偽りなき姿を子どもが見ることで「自学自修」の習慣を得ることができるというのである。つまり、彼が「教育」を語るとき、総てではないものの、先に「教師の人格」といった教師修養論が肝要とされるのである。教師が自己修養を行うことで人格の重みが増し子どもを強く引きつける力が備えられ、教育上の方法は活きてくる。つまり、教育方法論は第二義的なものであり、第一義は教師の人格形成、教師

修養なのである。

また、菅沼は論考「本県教育の使命」において、「成績のための成績を上げることに腐心し、果ては成績と云ふことに囚われて、自由な天地の活動や、大局に着眼する教育を殺しては居はしまいか」<sup>33</sup>と当時の教育界の成績重視を批判したうえで、「児童をして、真に自己の要求に立つて、自己自身の道を発見し、開拓して行かうとする決心と態度とを持たせる。だいいじな根本問題が閑却されてはすまいか」<sup>34</sup>と述べている。つまり、眼に見える成績をあげることに拘泥することは真の教育ではないとし、眼に見えず容易に成果がわかることのない「自己自身の道を発見」することに向かつて児童を準備させることこそ教育の根本問題とする。つまりここでも、特異な教育方法論で児童の注意を惹くのではなく、教師が修養を通して獲得した人格の重みによって注目させ児童が自ら何かを発見できることを重視する姿勢がうかがえる。

そして、菅沼は「自己自身の道」を発見する修養の源泉を信州の大自然に見いだす。如実と融合して初めて体得することの出来る眼で見えぬ働きなど、総ては見得ることのできない大自然を信州人は生まれながらにして共通に享受している。この眼で見えぬ働きや世界を開拓することこそ教育的活動の根底であり、それに支えられた「真生命」を発揮することこそ信濃教育の使命であるとする<sup>35</sup>。それこそ、「真の自己」を見出すことであり、教師修養を成す源泉なのである。こうした彼の人格主義、修養論は同時代に知識人に流行していた「大正生命主義」<sup>36</sup>の、特に西田の『善の研究』の影響を受けていると言えるのではないだろうか。彼が教育の根底とした眼に見えぬ働きは、西田のいう「純粹経験」であることが推察できる。『善の研究』において、宗教的要求は絶対無限の力に合一して永遠の真生命を得んと欲する要求であり、意識の根底に働く統一力を実体験することで内なる神に至り自己の真生命を見出す<sup>37</sup>、とされる。西田が宗教と生命の関係を語るように、菅沼は信州の大自然という神秘に「真生命」を見出



したのでろう。

最後に『信濃教育』に展開された菅沼の教育思想を以下の引用を軸にまとめる。

教育は吾が天職なり、吾が使命なりと確く信じて、一生を之に託し、敢て献身的努力を惜まざる、我が信州の小学校教員が高き信念と、確固たる覚悟とを操持して教育尊重、教権確立の為に、終始変らざる奮闘的精進を続け以て精神を重んじ、正義を愛する、人格的教育を高唱するにあり、と深く信ずるものである<sup>38</sup>

菅沼は小学校教師としての立場から、「児童の直覚力」を前提に、教師が児童の前で自己を偽ることができないことを思想の出発点に据える。直覚力によって教師は「真の自己」を児童に提示し続ける使命にある。そして、それには「生命」に触れた修養が必要だという教師修養論を主張する。教師は人として「真に生きる」必要があり、[生の活動＝宇宙人生の真善美への要求＝自己の要求]に働きかけることこそが教授だとする。つまり、自己の力によって「生命」を開拓し、「自己の尊貴なるところを自覚し、徹底する自己を確立」することで、教師自身が人格の重みを増すことこそが理想である。それゆえに、教師は「教育は吾が天職」という信念がなければ厳しく、こうした教師像こそが教育尊重、教権確立につながるという。こうした生命主義に連なる人格主義、教師修養論こそが彼の考える教育の第一義である。

### (3) 菅沼の教育思想への西田哲学の影響

次に、菅沼の教師修養論に対して西田哲学が与えた影響をどこに認められるかを考察する。1911（明治四十四）年に『善の研究』を知り愛読書とした彼が1914（大正三）年以降『信濃教育』に寄せた論考が『善の研究』

から強く影響を受けていたことは間違いないと言える。

まず、菅沼の教育思想の根底にある〔生の活動＝宇宙人生の真善美への要求＝自己の要求〕への『善の研究』の影響を考察する。ここでの「宇宙」とは『善の研究』と同じく万有であり神と意味を同じくするものである<sup>39</sup>。また、「真善美」という表現も『善の研究』において登場する<sup>40</sup>。『善の研究』において「真善美」は、人格の実現、即ち真なる要求の満足という前期西田哲学における「善」の概念をまとめる際に使われる。西田は「我々が内に自己を鍛錬して自己の真体に達するとともに、外自ら人類一味の愛を生じて最上の善目的に合ふ様になる、之を完全なる真の善行といふのである」<sup>41</sup>と述べ、真の自己を求める姿勢に「善」を見出す。つまり、「真善美への要求」は最上の善目的に合う要求であり、それは自己の真体に達しようとする「自己の要求」なのである。また、他箇所でも「意志の発展完成は直に自己の発展完成となるので、善とは自己の発展完成 self-realization であるといふことができる。即ち我々の精神が種々の能力を發展し円満なる發展を遂げるのが最上の善である」と述べ、それゆえに「善」は「美」に接近するとされ、西田の「美」とは物が自然の本性を發揮することであることから、それは実在の概念とも一致するとされる<sup>42</sup>。ここでも真、善、美が一致することが示されている。そして、これらを踏まえ、西田は「善とは自己の内面的要求を満足する者をいふので、自己の最大なる要求とは意識の根本的統一力即ち人格の要求であるから、之を満足する事即ち人格の実現といふのが我々に取りて絶対的善である」<sup>43</sup>とする。ここでいう「人格」とは知情合一、主客合一の境地に現れるものである。つまり、西田の説く真の自己に到達せんとする「善」とは人格主義的であると言える。

菅沼が説いた教師修養論において「真の自己」を見出すというとき、その「自己」は恣意的な主観ではなく、自分を突き動かす「真の要求」を内包する「生命」の活動である。このとき、彼はただ認識する次元にとどまらず、内から湧き出る目に見ることのできない「直の生命」を「直覚」す

ることを説く。そして、種々の能力が「円満なる発達」を遂げることこそ「生命」の活動であり、それに作用する教育とは最上の善に向かう力に作用することであると言える。こうした彼の「真の自己」を語る論調は上記で見た『善の研究』における「善」の概念が基調となっていることが推察できる。そして、それを成すには教師は人格の重みを増すために真の自己を確立する必要がある、という教師修養論は西田の説いた人格主義の影響下にあると言える。

また、菅沼が西田の人格主義の影響を受けたことは、先述のとおり、生命主義の影響下に彼があったことを意味するだろう。檜垣（2011）によれば、西田哲学は一貫して「行為」から世界に存在する「私」を考えるとという問題をめぐって常に議論しており、そこから生命論が生じてきたとする。「行為」として何かを作り上げていく、つまり「ポイエシス」の論理が西田哲学の核心にあるとする。それゆえに、「純粹経験」の議論も生命の運動性を一つの判型とした生命論であるとする<sup>44</sup>。また、『善の研究』を生命主義の立場に立って解釈した代表的人物と言えば倉田百三であろう。彼は、『善の研究』を「人格的自然主義」と解した。このように当時は個人の人格向上を目指し、その先に大いなる生命への目覚めを期待し教養主義と生命主義が接続する思想が存在していた<sup>45</sup>。菅沼もまた、西田の人格主義にふれ、教養主義、そして生命主義へと接続していく同時代の流れの中にいたのだ。

以上より、菅沼の説く生命主義に連なる人格主義・教師修養論は『善の研究』の思想に共鳴すると言えるだろう。西田哲学における修養論に関して、西平（2020）は西田が修養を直接語らなかったとしつつも、結果的に修養の内実を別の言葉で解き明かしているとする。先に見たように、『善の研究』では「善とは自己の発展完成 self-realization である」とされ、そして「善」は「人格的善」とであるとされる。これが明治期の修養論と同時期に「修養」という言葉を用いずに西田が展開した修養論なのである<sup>46</sup>。こ

れを踏まえると、菅沼が『善の研究』から影響を受け、教師修養論を構築したことも当然と言える。彼は「対談『哲学と信州の教育界』」において、「毎日の実際教育のうえに具体的に表れた効果というものは、あまりなかつたと思うのだが、教育者としての人生観の根底を作るという意味で、自己の精神生活・内面生活を豊かにし、ある種の信念とプライドを持つことができたという一面はあると思う」<sup>47</sup>と西田哲学に触れた影響を語っている。つまり、彼は西田哲学を人間観ひいては教師観・教師修養論に対して影響を与えるものとして受容したのであり、決して教育方法論構築に影響したわけではない。

### 3. 新教育思想における西田の存在感—大正新教育をめぐる研究動向を参考に

次に、本稿の議論を教育思想史研究上に位置づける参照軸として、菅沼が教師として活躍した同時代に展開された大正新教育に関する研究動向、とくに「生命主義」を大正新教育思想の基盤に据えた研究を採用する。以下、橋本・田中（2015）が示した大正新教育の思想における「生命主義」そして「アガペーとしての愛」と、矢野（2021）が示した大正新教育実践家たちの思想の背後に西田哲学・京都学派が存在したという仮説を並置し、矢野の立場を補強するものとして本稿で示した菅沼に対する西田哲学の影響を配置する。結論を先取りして示すのであれば、本稿は信濃教育界における西田哲学の存在を示すことで矢野の立場を補強するとともに、これまで西田哲学が影響していたとされた人間観、子ども観、教育観のみならず、教師観や教師修養論として西田哲学を受容する動きが教師レベルで存在したことを示唆する。

### (1) 大正新教育と生命思想

橋本美保・田中智志編『大正新教育の思想—生命の躍動』（東信堂，2015年）では、大正新教育と「生命」の関係性が示され、教育方法や実践に関心が寄せられがちであった大正新教育を思想という新たな切り口で着目している。

田中智志「思想としての大正新教育へ：呼応し躍動するアガペー」において、大正新教育の思想史的位置づけが考察される。森田尚人の「明治期を批判する形で登場した大正新教育は、『功利主義』のイデオロギー、『進化論』の思想圏に抗する思想、すなわち非功利主義的・非進化論的な思想を踏まえつつ登場したのではないか」という考えに対し、田中は二項対立図式で理解するのではなく言説全体を彩る文脈に位置づけ分析する必要があるとし、新教育の文脈で言及されている欧米の新教育思想・進歩主義教育思想との関係を十分に追求するべきだとする<sup>48</sup>。そして、田中は「大正新教育の思想が語る生命概念は、以下に示すように、デューイの自然思想と、またベルクソン、ドクロリー、フレネの生命思想と、少なからず親和的である」<sup>49</sup>とする。

デューイは「生命本来の力」を呼応可能性、つまり他からの働きかけに応える力にあるとした。そして、生命本来の力は人と人、世界との相互活動の前提であり、「コミュニケーション」となる。田中は、「このコミュニケーションには、人をアガペーとしての愛に誘う理念化の営みがふくまれている。すなわち、少なくとも人には、アガペーとしての愛に向かう力が、はじめから贈られている。人の自然性は、このアガペーとしての愛に向かって充全化される運命にある」<sup>50</sup>とみなす。

一方、ベルクソンの生命思想は、「生命の躍動」（エラン・ヴィタール）に代表されるように「生命」を人の諸活動を倫理的に基礎づける「根源性」と見なす考え方であった。田中はベルクソンの思想を、「生命全体の根源性は、さまざまな生命体全体に通底する、生きるという躍動性それ自体で

ある。この生命全体の躍動性は、一命において他の一命への、そして生命全体への『愛』として顕れる」<sup>51</sup>とする。つまり、ベルクソン哲学において「アガペーとしての愛」に向かうという不断の躍動こそ「真理」に向かう営みの本態であるのだ。

田中が「アガペーとしての愛の存在論としてのキリスト教思想（キリスト教存在論）は、デューイ、ベルクソンの自然・生命の思想と相通的である」<sup>52</sup>と述べる様に、デューイ、ベルクソンともに「アガペーとしての愛」に「生命」が向かうと考えていた。キリスト教的存在論における生命の本態は、功利主義的・進化論的なものによって人が喪失してはならない真理、すなわち「アガペーとしての愛」である。アガペーとしての愛は他者への無条件の気遣いなど自他が呼応すること（デューイ）であり、無条件に気遣うなかで生命への畏敬（ベルクソン生命思想）を学ぶこととなる。こうしたアガペーとしての愛を語るキリスト教的存在論の中に大正新教育の思想が位置付けられる可能性を示すのである。

## (2) 大正新教育の思想における西田哲学

次に矢野（2021）「大正新教育のなかの西田幾多郎」における大正新教育実践家たちの思想の背後に存在した西田哲学・京都学派哲学への省察を見る。大正期における子どもの興味と感心に従い自主性と主体性を強調した教育において、「私は、この時期、西田幾多郎の純粹経験と自覚の哲学が新教育の教育思想の形成において、同時代の著名な哲学者の読書界一般への影響というレベルを超えて、重要な役割を果たしたのではないかと考える」<sup>53</sup>と述べ、矢野は西田幾多郎の『善の研究』や『自覚に於ける直観と反省』が思想形成に重要だったのではないかと仮説的に主張する。

矢野は成城学園の長田新、手塚岸衛の自由教育論を先導した篠原助市、成城・玉川学園の小原國芳、自由大学の土田杏村ら新教育に関係の深い思想家たちが京都帝国大学文学部に進学し西田の下で学んだ事実より、彼ら

の思想形成において西田の影響があったことを指摘する。そして、日本におけるベルクソンブームの火付け役が西田であったこと<sup>54</sup>を念頭に、新教育の思想家が導入したベルクソン哲学は、「ベルクソン—西田哲学」ではないかと推測する<sup>55</sup>。

矢野によれば、新教育思想家たちの教育思想において西田哲学がどう結びついているか、つまりベルクソン哲学がどのように自覚論において見られるのかを追っていくと、これまで新カント学派と見なされてきた思想家たちに西田哲学の影響を見て取れるという。それは、ベルクソン哲学と接続する前期西田哲学、つまり『善の研究』や『自覚に於ける直観と反省』などによる「ベルクソン—西田哲学」のエラン・ヴィタール受容といった哲学をベースとした篠原の「自覚」の理論<sup>56</sup>や、西田の『自覚に於ける直観と反省』の論考を下敷きにして論が組み立てられたとされる土田の〔純粹経験—人格—生命—自覚〕<sup>57</sup>の連なりなどである。この時期の西田哲学は、ベルクソン哲学との共鳴のみで考えるのではなく、一方にベルクソンの生命論、他方で新カント学派の論理主義があり、その両方の哲学の間で生命と論理とを捉える思考方法として位置づけられ<sup>58</sup>、そうした思考の様式を西田の講義や演習に参加した後の教育思想家たちは学んでいったのである。それゆえに、矢野は大正新教育思想の背後に水脈として西田哲学が存在するのではないかと仮説的に主張する。最後に、矢野の仮説的主張の最も重要な論述を示したい。

これまで気づかれることなく見逃されてきた資料のうちに、西田哲学と結びついた痕跡がなかったかあらためて調べ直すと、海外の新たな教育思想の影響といったものにとどまらず、その思想を受けとめる地平としての西田哲学という、これまでの大正新教育像とは異なる別の風景が浮かびあがってくるだろう。それは個々の思想家のテキストという個別の領野を横断して潤す西田哲学という水脈を取り逃がすこ

となく、個別のテキストの読解や解釈が深まることにとどまらない。日本の教育思想の営為が（中略）多層的で複雑に交錯するハイブリッドな教育学的思考の努力の試みとして評価することができるようになる。そして、1910年代後半から60年代にわたる日本の教育思想史の全体が、西田一田邊の哲学・京都学派の哲学を中心に据えることで、互いに批判しつつ変容していく思想的親族関係をもったものが作りだす運動態として、展望することができるようになる<sup>59</sup>

以上より、橋本・田中（2015）と矢野（2021）の相違点を認めることができるだろう。橋本・田中（2015）は、「二項対立図式で理解するのではなく言説全体を彩る文脈に位置づけ分析する必要があるとし、新教育の文脈で言及されている欧米の新教育思想・進歩主義教育思想とのかかわりを十分に追求するべきだ」とし新教育における思想をデューイやベルクソンの影響を明らかにしたが、それはあくまでも海外の教育思想・進歩主義教育思想をどのように受け止め、解釈し、実践したかという視点に留まっていた。

一方、矢野（2021）は大正新教育におけるベルクソン哲学など海外の教育思想の影響を認めつつも、新教育運動を支えた教育実践家たちの思想の背後には西田一田邊の哲学、京都学派の哲学の存在を認める必要があり、それを前提として分析することで日本の教育思想の営為が「多層的で複雑に交錯するハイブリッドな教育学的思考の努力の試み」として評価することができるとする。この立場は、大正新教育のみならず、1910年代後半から60年代にわたる日本の教育思想は海外からの教育思想の受容・解釈のみではなく、日本独自の哲学の影響を素地とした「日本の教育思想」を作り上げていたことを示すことにつながると言えるだろう。また、これは橋本・田中（2015）の海外の新教育事情の展開も視野に入れ日本の新教育運動を考える必要があるという姿勢を否定するものではない。むしろ海外



の新教育事情，教育思想をどのように解釈したのかを，これまで以上に受容する日本側の思想的背景を確固たるものとして考察する，つまり西田哲学，田邊哲学，京都学派哲学など独自色を有する「日本の哲学」を背景として日本教育思想を形成したことを考察することができることとなるだろう。

大正新教育思想と西田哲学，京都学派哲学の関係を論じる必要性は，橋本美保・田中智志編『大正新教育の実践—交響する自由へ』（東信堂，2021年）においても見られると言ってもよい。橋本・田中（2021）において，西村拓生「木村素衛の教育思想の臨床性—プラクシスを語る言葉」が掲載されていることがその証左と言えるのではないだろうか。当然ながら木村素衛は教育学者であり，教育学において語ることは不思議ではないように思える。しかし，木村の主著『表現愛』が出版されたのは1939（昭和十四）年であり大正新教育の時代に活躍したわけではなく，西田の勧めで美学，哲学から教育学へ研究の場を移し京都学派の思想圏で自身の教育哲学，思想を構築し，また戦後新教育において戦争責任を問われた京都学派に位置づく者の一人として忘却された教育学者であった木村を，「大正新教育の実践」を題目に掲げる著作の中で取り扱ったことは重要な意味をもつと言えるだろう。

### （3）教師による西田哲学受容—菅沼の教師修養論を参考にして

以上を踏まえ，矢野（2021）の仮説的主張を補うことを試みる。それに寄与するものとして，本稿で分析した菅沼知至の教育思想が参考となるだろう<sup>60</sup>。矢野（2021）において八大教育主張の論者の一人である小原國芳に注目し，彼が『善の研究』を何万冊も購入し教師との講読会の教科書にしたこと，新教育実践を支える根本思想として西田哲学を位置づけ，教師の人間観，生命観，教育観を活性化することを期待した<sup>61</sup>，と指摘されているなど，西田哲学の教育現場への影響は既に指摘されている。しかし，

教育学者ではない現場の教師における西田哲学の受容に関しての指摘は未だ不十分である。

先に参照した菅沼の論考「児童の直覚力」の冒頭に以下の記述がある。

現代世界の硯学ベルグソンが近世の科学から出発して、幽邃な思索と熾烈な努力の結果、「純粹持続」を説き「直覚」を力説する様になつたのは、全く彼の不断の内省と、凝滞を脱れ殻を破つて刻々に進んで行く、直撃なやむにやまれぬ生命の要求がしからしめたのであらうと思ひます<sup>62</sup>

菅沼は 1914（大正三）年の時点で既にベルクソン哲学に言及しており、ベルクソンは「純粹持続」、直覚」を力説するとし、ベルクソン哲学は「生命の要求」が結実したものであると述べている。これは矢野（2021）が主張する「ベルクソン—西田哲学」の受容の表れと見てよいだろう。また、論考「信濃哲学会と私」（1137号）においても、明治末から大正初にかけ信濃教育界において哲学的研究が盛んになり、しきりにベルクソン、オイケン、ジェームスの哲学が紹介宣伝され、これ等の哲学を知らない者は時代遅れのような感じがしたと回想する<sup>63</sup>。また、1913（大正二）年6月の信濃教育会総集会前後の三日間に長野市西沢書店だけでも『ベルグソンの哲学』の訳書が6,70冊売れたことが資料として残っている<sup>64</sup>。

また、大正新教育についても、「近頃大正の新教育に対する理想が各方面の識者によつて暗示され、要求され絶叫されて来つつあるが、要するに自己の力によつて自己の運命を開拓して行くことの出来る力を養はねばならぬと云ふ点においては一致している様である」<sup>65</sup>と菅沼は述べる。彼は、「自己の運命を開拓して行くことの出来る力」こそが教授の要点であるという点に大正新教育の根底に共通するものを見出しており、彼の「生」を根底に据え「人として徹底」することを説く思想と共鳴すると推察でき

る。これは前節でみた様に、彼もまた「生命主義」の影響下にある教育者であったことと相応するものと見ることができるだろう。そして、これまで見てきたように、こうした教育を全うするには「真の自己」を教師が確立する必要があるとするのである。

次に、菅沼の生命主義に連なる人格主義・教師修養論と哲学の関係性が最も強く表れている箇所を引用する。

自分たちが、日たずさわっている教育の仕事を、できるだけ後悔の少ない充実したものにしていくためには、どうしても教師としての実力をつけるとともに、深い思想の研究と高い人格の養成に努めることがなによりも根本である。それには、人格思想ともにすぐれているりつばな哲学者に師事して、長く変らぬ指導を受けて各自の人格をみがき、思想を深め、人生観を確立していくにしくはない<sup>66</sup>

つまり、菅沼は「自己」を開拓できるよう児童を教授するために必要な教師修養において、「深い思想の研究と高い人格の養成」、つまり哲学を享受し人格向上を求める必要があると考えたのである。そして、彼は西田哲学にその価値を見出したのだ。

以上をまとめると、菅沼はベルクソン哲学に触れるなど、生命主義の影響下にあった。しかし、これは矢野（2021）が指摘する「ベルクソン—西田哲学」であり、西田哲学からの影響を受けながら、彼の教育思想の根底にある「生」や「自己」を確立していったと言える。これは、節の冒頭に示したとおり、大正新教育運動期において海外の教育思想はたしかに受容され実践に反映していったが、その際単なる海外思想の受容ではなく、西田哲学をはじめとした日本の哲学を土台とし海外教育思想を解釈していく動きと見るができる。

また、矢野（2021）は大正新教育の思想家における人間観、教育観、子

ども観への西田哲学の影響の指摘に留まっていたのに対し、本稿で分析した菅沼の思想展開は教師観、つまり教師修養論として西田哲学を受容する動きが教師レベルでは存在したことを示唆するものである。つまり、篠原助市たちのように実践家でありながら思想家であった人と異なった西田哲学受容の形として、純粋な教育実践家である菅沼は教師の理想像の設定、そして教師修養の手段として西田哲学を受容したことが想定されるのである。

### おわりに一まとめにかえて、今後に残された課題

最後に、残された課題について簡潔に触れたい。第一に、矢野(2021)で示された大正新教育における西田哲学・京都学派の水脈という仮説を補強することを本稿で目的としたが、菅沼知至のみの言及に終始してしまった。信濃哲学会の面子で『信濃教育』に寄稿した者は守屋喜七をはじめ多く存在しており、更なる信濃教育界における西田哲学・京都学派の影響を探ることが今後の課題と言える。その際、「生命主義」に対して有田(2011)が指摘するように、国民教化のための有力なツールとしての一面があることも注意しなければならない。

第二に、菅沼の教育思想に着目したが、彼はアララギ派に属した歌人でもあり、西田哲学の影響が歌にも出てくることを認めている。それゆえに、彼に島木赤彦(久保田俊彦)と交流があったことを念頭に、アララギ派の教員が大正期の信濃教育に強い影響を与えたことへ着目し、そのベクトルから西田哲学の教育への影響を考える課題が残されている。

第三に、本稿では西田哲学を教育学的に解釈する枠組みを主に『善の研究』に求めたが、その枠組みは今後も精査する必要があるだろう。つまり、西田哲学の教育への影響の解像度を上げるためには西田哲学内部における「生命論」や「形成論」に対しての哲学的研究が必要である。

註

- <sup>1</sup> 矢野 2021：6-7, 11 頁, 西村 2022 を参照
- <sup>2</sup> 矢野 2021：13 頁を参照
- <sup>3</sup> 京都学派教育学に関する研究として, 川上 2021, 西村 2014, 森田 2020, 門前 2019, 山田 2022 などが挙げられる。
- <sup>4</sup> 窪田 (1973) によれば, 埼玉県の熊谷女子校で大正新教育を支えた高橋正吉は月給 48 円の内, 毎月平均 10 円程書籍代に充てていた。西田の『自覚に於ける直観と反省』を購入し, 同僚の吉田芳雄は篠原助市, 長田新, 小西重直, 波多野精一らを直接訪ね指導を仰いだという。吉田は長田, 小西と親交を深めたことで京都哲学会に入会し, 月に一回程京都に出向き西田らの指導をうけていた (窪田 1973：42-43 頁を参照)。
- <sup>5</sup> 金井 (2013) に信濃教育会と西田幾多郎の関係, また務台理作の働きが詳述されている。
- <sup>6</sup> 長野県佐久群教育科学研究会編 1975：23 頁を参照
- <sup>7</sup> 山本 (2014) によると, 明治初期において「教育が, 国家の発展を担うに足る『国民』の育成としてとらえられるとともに, 国家の政策的意図に基づいて, それにふさわしい体制が模索され, その整備・確立が図られるようにな」(山本 2014：63 頁)り, 「近代教育」とは政治的課題と教育課題の二つを内包したもののいう前提に立ち教育政策は進められた。
- <sup>8</sup> 長野県佐久群教育科学研究会編 前掲書：23-28 頁を参照
- <sup>9</sup> 同書：28-30 頁を参照
- <sup>10</sup> 1866 年, 北佐久郡に生まれる。1889 年長野師範学校卒業。1905 年北佐久教育会会長, 1911 年信濃教育会副会長, 1918-32 年教育会会長を務める (同書：47 頁を参照)。
- <sup>11</sup> 同書：63 頁を参照
- <sup>12</sup> 名称は雑誌『日本及日本人』の「東西南北」欄にちなんでおり, 明治末年に教員読者たち (齋藤節, 手塚縫蔵が中心) によって作られた会である。岡村千馬太, 長坂利郎, 松岡弘が関わった。
- <sup>13</sup> 星校長の教育方針は長野県教育に適応せざるとして, 十二名の委員が星氏に反省を促すために行動を起こす (『長野県教育史』第十三巻：1019-1020 頁を参照)。
- <sup>14</sup> 『長野県教育史第三巻』：621 頁
- <sup>15</sup> 長野県佐久群教育科学研究会編, 前掲書：69-73 頁を参照
- <sup>16</sup> 1872 年, 上伊那郡藤沢村 (現高遠町) 生まれ。長野師範学校卒業。長野市後町小校長・県視学を務める (並木 2003：299 頁を参照)。1910 年以降, 信濃教育会の本会選出議員を務め, 1915 年から 1924 年にかけて信濃教育会専任幹事・同会主事などを断続的に務める。信濃哲学会創設にあたって代表となる。1920

- 年 5 月から 1923 年 9 月まで長野市教育会会長を務める（信濃教育会 1977：568-571,768 頁を参照）。
- 17 『長野市教育会史』1991 年：165-166 頁を参照
- 18 1898 年生まれ、下伊那郡豊丘村へ養子。1912 年 3 月、長野師範学校第一部卒業。1918 年に「東西南北会」の拠点校・塩尻小学校に迎えられる（並木、前掲書：294 頁を参照）。
- 19 務台 1966：422 頁を参照
- 20 金井 2013：30-31 頁を参照
- 21 務台 2001：284 頁、括弧内は務台
- 22 「信濃哲学会と私」（841 号）においては 26 名と記載されている。
- 23 『信濃教育』841 号、1956 年：88 頁（以下、雑誌『信濃教育』からの引用・参考は巻数（発行年）、頁数のみを表し（例、841（1956）：88 頁）、旧字体は新字体に改める）
- 24 336（1914）：30 頁
- 25 同書：31 頁
- 26 340（1915）：84 頁
- 27 同書：84 頁を参照
- 28 364（1917）：12 頁
- 29 509（1929）：2-3 頁を参照
- 30 354（1916）：61 頁
- 31 同書：62 頁
- 32 同書：63 頁
- 33 346（1915）：27 頁
- 34 同書：27 頁
- 35 同書：27-28 頁を参照
- 36 鈴木（1995）によると、大正期における急速に発展した重化学工業化に対し、無機物質に還元できない「生氣」を生命現象の根本に想定する考えである。つまり、存在を貫いて流れる「生命」を発揮し、それが文化的創造につながるという思想である。
- 37 西田 1911：135,141 頁を参照
- 38 528（1930）：146 頁
- 39 『善の研究』において「宇宙」という言葉は幾度も登場するが、「我々の真の自己は宇宙の本体である、真の自己を知れば嘗に人類一般の善と合するばかりでなく、宇宙の本体と融合し神意と冥合するのである」（西田 1911：134 頁）「神はかかる意味に生於て宇宙の根底に於ける一大知的直観と見ることができ、又宇宙を包括する純粹経験の統一者と見ることができ」（同書：148 頁）など、「宇宙」は万有という言葉に近いと言えるだろう。

- 40 「我々が実在を知るといふのは、自己の外の物を知るのではない、実在の真善美は直に自己の真善美でなければならぬ」(同書：131 頁)
- 41 同書：133 頁
- 42 同書：116-117 頁を参照
- 43 同書：122 頁
- 44 檜垣 2011：49, 55-56 頁を参照
- 45 碧海 2020：46, 51 頁を参照
- 46 西平 2020：172-175 頁を参照
- 47 889 (1960)：63 頁
- 48 橋本・田中 2015：520, 522-524, 528-529 頁を参照
- 49 同書：530 頁
- 50 同書：533 頁
- 51 同書：533 頁
- 52 同書：536 頁, 括弧内は田中
- 53 矢野 2021：120 頁
- 54 「ベルクソン哲学の本格的な紹介は、西田幾多郎の「ベルクソンの哲学的な法論」(1910 年)と「ベルクソンの純粹持続」(1911 年)を嚆矢とする」(宮山 2005：84 頁)とされ、これ等を皮切りにベルクソン哲学の紹介分が次々に登場することとなる。
- 55 矢野前掲書：120-121 頁を参照
- 56 同書：131-132 頁を参照
- 57 同書：134 頁
- 58 同書：135 頁を参照
- 59 同書：145 頁
- 60 矢野 (2021) において菅沼に言及されているものの、教師の中で西田哲学の熱心な読者がいたことを示す例として紹介されているに過ぎない (同書：143 頁を参照)。
- 61 同書：141-142 頁を参照
- 62 336 (1914)：30 頁
- 63 1137 (1981)：54-55 頁
- 64 『長野県教育史 第十六巻』：346 頁を参照
- 65 354 (1916)：64 頁
- 66 841 (1956)：90 頁

参 考 文 献

- 有田和臣 2011 「生命主義哲学から生命主義文芸論への階梯—生命主義者としての西田幾多郎, その小林秀雄に与えた影響の一側面」『京都語文』(佛教大学国語国文学会) 第 18 号: 153-173 頁
- 碧海寿広 2020 「大正の教養主義と生命主義」島蘭進, 末木文美士, 大谷栄一, 西村明編『近代日本宗教史第三卷 教養と生命—大正期』春秋社: 39-66 頁
- 川上英明 2021 「田邊元と森昭の経験主義批判における認識論の問題—京都学派教育学における『行為的自覚』の系譜」『近代教育フォーラム』(教育思想史学会) 第 30 号: 147-157 頁
- 窪田祥宏 1973 「大正期における新教育運動の展開: 埼玉県の場合を中心として」『教育学雑誌』(日本大学教育学会) 第 7 卷: 38-50 頁
- 鈴木貞美 1995 『大正生命主義と現代』河出書房新社
- 西田幾多郎 (2002-2009 年に発刊された『西田幾多郎全集』岩波書店新版 全 24 巻を用いる)
- 1911 『善の研究』『西田幾多郎全集 第一巻』
- 1917 『自覚に於ける直観と反省』『西田幾多郎全集 第二巻』
- 1933 「教育学について」『続 思索と体験』『西田幾多郎全集 第七巻』
- 西村拓生 2014 「『京都学派』教育人間学の暫定的マッピングの試み」『近代教育フォーラム』(教育思想史学会) 第 23 号: 77-87 頁
- 2022 「書評 矢野智司著『京都学派と自覚の教育学: 篠原助市・長田新・木村素衛から戦後教育学まで』」『関西教育学会研究紀要』(関西教育学会) 第 22 号: 66-70 頁
- 西平直 2020 『修養の思想』春秋社
- 橋本美保・田中智志編 2015 『大正新教育の思想—生命の躍動』東信堂
- 2021 『大正新教育の実践—交響する自由へ』東信堂



- 檜垣立哉 2011『西田幾多郎の生命哲学』講談社学術文庫
- 宮山昌治 2005「大正期におけるベルクソン哲学の受容」『人文』（学習院大学人文科学研究所）第4号：83-104頁
- 森田伸子 2020「京都学派における『形成』概念の諸相と教育—西田・三木・木村を中心に」小笠原道雄，森田尚人，森田伸子，田中每実，矢野智司著『日本教育学の系譜 続 京都学派とマルクス主義』勁草書房：89-155頁
- 門前斐紀 2019『木村素衛「表現愛」の人間学—「表現」「形成」「作る事」の身体論』ミネルヴァ書房
- 矢野智司 2021『京都学派と自覚の教育学：篠原助市・長田新・木村素衛から戦後教育学まで』勁草書房
- 山田真由美 2022『京都学派の教育思想 歴史哲学と教育哲学の架橋』勁草書房

### 教育会史・教育史関連参考文献

- 金井徹 2013「務台理作の信濃教育会における役割の検討—信濃哲学会を中心とした京都学派との関係に着目して—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』（東北大学大学院教育学研究科研究年報編集委員会）第61集・第2号：23-38頁
- 信濃教育会 1977『信濃教育会九十年史 上』信濃教育会出版部
- 信濃教育会編 1982, 1988, 1992, 1993『雑誌信濃教育』国書刊行会（発行年：雑誌刊行期間；1982年：明治19年～大正15年，1988年：昭和21～35年，1992年：昭和2年～10年，1993年：昭和11～20年）
- 信濃教育会編 1982『雑誌「信濃教育」総目録』国書刊行会
- 長野県教育史刊行会編 1983『長野県教育史 第三巻』長野県教育史刊行会
- 長野県教育史刊行会編 1978『長野県教育史 第十三巻』長野県教育史刊

行会

長野県教育史刊行会編 1981『長野県教育史 第十六巻』長野県教育史刊

行会

長野県佐久群教育科学研究会編 1975『長野県教育のあゆみ』労働旬報社

並木張 2003『信濃教育を創り支えた教師たち』信濃毎日新聞社

務台理作 1966「後記」『西田幾多郎全集 第十四巻』岩波書店

—— 2001『務台理作著作集第五巻』こぶし書房

山本正身 2014『日本教育史 教育の『今』を歴史から考える』慶應義塾出

版会